

交通は夏季は舟或は馬だが、冬は近距離は馬糧其の他は總べてスキーであつて、一月以降月一回單冠灣に入港する定期船の郵便物を五、六十人の人間がスキーに乗つて一人四、五十疋も背負ひ野を越し山を越えて運んで行く長蛇の列もまた偉觀であり島でなければ見られない風影である。

夏季我々は事業用務で支場に出張する時は殆んど馬で途中丈余の熊笹を切り開いた視野の狭い起伏の多い山道を前方の熊を警戒しながら鼻唄まじりで馬を馳らせ、また刻々と變る山野の景色に目を樂しまもつゝしつとり汗ばんだ顔を風に吹かせて行く氣持もまたなんととも言はれぬ島の味である。

冬はスキーでひざ迄の雪を踏みつゝ三區の驛遞で一休み後愈々難關の大曲り峠を約三、四十分でエツサラ

NEWS

内水面漁場監理委員會 誕生

内水面における漁業制度改革を實質的に推進する最も大きな原動力として内水面漁場監理委員會がこの程

ホツサラ登りつめ、こんどは雪煙に包まれて急坂を一氣に迂る壯快な氣分、其の後は、なだらかな下り坂をボン登りに至り紗那村を眼下に見て吹きさらし寒風に汗を冷しつゝ、にぎりめしをバクツク氣分は冬將軍のおとづれと共に懐しく想ひ出されます。

疲れた体を勵ましあつて漸く支場にたどりつけば支場長はじめ場員が心から勞苦を「ねぎらい」歡待して呉れる時は、今迄の苦しみも何も打忘れ目頭に熱いものがにじみ出る。此の氣持は我々島の者のみが持つ特異なものと言つても過言ではないと思う。今は異國となり再び訪れる事が出来ないであろう擇捉島を憶う時あの群上する鮭鱒が「ほうふつ」として目前に浮び懐しき又一入である。

(徳志別事業場主任)

誕生し漁業制度改革の精神にのつとつて發足する事になり、昨年十二月二十二日には札幌の労働會館に於いて第一回北海道内水面漁場監理委員會が開催され飛島貫治氏が委員長に選任された。

委員の顔ぶれは次の通りである。

北海道内水面漁場管理委員會委員一覽

氏名	年令	住 所	主なる履歷
川村秀次郎	五一	龜田郡七飯村 大字大沼	大沼漁業協同組合 理事 大沼水産加工協同 組合組合長
佐藤 廣司	三三	網走市字呼人	西網走漁業協同組 合參事
松岡 實	三二	阿寒郡阿寒村 字阿寒湖畔	阿寒湖漁業協同組 合組合長 部落副會長
伊藤榮三郎	五七	石狩郡 石狩町字花畔	石狩町漁業協同組 合組合長 石狩町議
齋藤四郎吉	五六	札幌郡江別町	札幌郡漁業協同組 合組合長
阿部 英一	三〇	釧路市港町	釧路市漁業協同組 合理事 釧路市議會議員
奥谷 悠一	五五	網走市南六條 東六丁目	釧路市教育委員長 港灣計畫專門委員 都庁計畫專門委員 網走市漁業協同組 合常任監事
芳賀 忠雄	四九	靜内郡靜内町 字入舟町	靜内漁業協同組合 組合長 靜内町議
本田 善助	六一	天塩郡 天塩町海岸通	天塩漁業協同組合 組合長 天塩町會議長
佐藤 良雄	四四	北見市 南三條六丁目	水産養鯉業
齋藤兵太郎	六三	十勝郡大津村	漁業
尾崎 勇	四二	標津郡標津村	標津村長
眞野 萬穰	五一	山越郡八雲町 大字八雲村	北海道鮭鱒保護協 力會連合會理事 八雲町長 北海道社會教育委 員
半田 芳男	六二	札幌市南十四 條西一丁目	北海道鮭鱒漁業協 同組合組合長 北海道内水養殖漁 業協同組合組合長
渡邊 宗重	六〇	函館市 松蔭町一二	北海道大學水産學 部教授
飛島 貫治	五九	札幌市南十四 條西十一丁目	小樽水産高等學校 長
山田 幸男	五〇	札幌市南八條 西十七丁目	北海道大學理學部 教授
結城 三詞	五二	釧路市 鳥取町一四八	北海道内水面漁業 協同組合理事 北海道鮭鱒保護協 力會連合會副會長 計十八名

(編者)